

広島都市学園大学の地域子育て支援拠点事業に 関する一考察（２）

— 「いーぐる」利用者への第４回質問紙調査から —

富田 道子・児嶋 芳郎・田丸 尚美・深澤 悦子・國清 あやか
須崎 朝子・瀧口 美絵・杉山 直子・石橋 由美

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

オープンスペースを利用している保護者を対象に、第４回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。第一に、主な利用保護者の年代は30代であり、第１子のみが利用している割合は約８割であった。ほとんどが核家族で、何かあった時に頼れる親族がいる者も８割いることが明らかになった。第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「口コミで知った」の回答者がもっとも多く、次いで「インターネット」であったが、特徴的なこととして「区役所や公民館」の回答割合が前回調査結果と比べて倍増し、「その他」の詳細では、助産師や小児科、他のオープンスペースなど外部機関からの紹介とする記述がみられた。第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は「子どもが喜ぶから」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから」、「ストレス解消やリフレッシュできるから」、「設備や遊具が充実しているから」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから」、「子どもを集団になれさせるため」、「あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむから」であった。第四に、子どもについての気がかり・心配ごととして、６割以上の者が「食事」を挙げ、次いで「からだの成長」、「トイレトレーニング」の割合が高いことが明らかとなった。第五に、オープンスペースに対しては、９割近くの利用者が「満足」と回答した。第六に、利用保護者自身については、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまふ」が高いことがわかった。さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、頼れる親族の有無に関わらず、利用者一人で子育てを担っている様子が窺えた。

キーワード：地域子育て支援拠点事業、大学、オープンスペース、保護者、乳幼児

はじめに

2015年４月に施行された「子ども・子育て支援新制度」。この制度は、保護者が子育てについての第一義的責任を有することとし、幼児期の教育・保育、地域の子ども・子育て支援を総合的に推進することを目的に、すべての子どもや子育て家庭の状況に応じたさまざまな支援を市町村が中心となって行うとされている。そのポイントの１つとして、地域の実情に応じた子ども・子育て支援の質・量の充実を図ることがあり、2014年７月に事業を開始した広島都市学園大学内にある「公募型常設オープンスペース」（以下、オープンスペースと称す）もその一端を担っている。

現在、広島都市学園大学における子育て支援拠点事業の量的充実については開室回数を

増やす対応をしているが、利用者のニーズに合わせたより質の高い事業をすすめていくためには、検討の余地がある。よって、その手掛かりを探るものとしてオープンスペースにおける利用者への質問紙調査結果を考察する。

1. 研究方法

(1) 質問紙調査対象者・時期・調査方法・倫理的配慮

質問紙調査の対象者は、オープンスペースを利用している保護者であり、調査時期は2016年9月1日～10月10日（107名、回収率100%）であった。また、利用者の居住地は、広島市南区が82.6%と圧倒的に多く、次いで南区に隣接する中区が11.6%であった¹⁾。

調査方法は、本紀要第1・2号での報告と同様に、オープンスペースを利用する保護者に調査依頼状と質問紙を手渡し、調査の目的とともに、①調査依頼状の内容に目を通した上で、フェイスシートの「調査に同意する・しない」のいずれかに印す、②「調査に同意する」者は各調査項目に回答後、また、「調査に同意しない」者は未記入のまま、質問紙を所定の場所に設置した箱に提出する、という手順を説明した。なお、プライバシー保護のために、回答中の利用者がある場合、調査員はオープンスペース内にいないことを心掛け、さらに、質問紙を回収の際、子育てアドバイザーや他の利用者に回答内容がわからない場所に箱を設置した。

なお、本調査は広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(2) 分析方法

質問紙調査における回答は、基礎統計量と回答の割合で集計し、全体的な傾向を把握した。また、項目間の関連性をみるために、SPSS Ver.22を使用してクロス集計を行った。

2. 結果と考察

(1) 属性・家庭環境

オープンスペース利用者に関する属性と家庭環境は次の通りである。

まず「これまでの利用回数」について、「初めて利用した」が17名（15.9%）、「2～4回」が29名（27.1%）、「5回以上」が61名（57.0%）であることが明らかとなり、利用保護者の5割以上がオープンスペースをよく利用していることがわかった。

利用保護者の年齢は30代がもっとも多いが、20代の割合も増えている（表1）。また、利用する子どもの詳細をみると、第1子のみ利用は80.4%であった（表2）。家庭環境は、利用者のほとんどが核家族であり、何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無では、パートナーと同居している場合、「頼れる親族がいる」と回答した者は80.2%であり、ひとり親家庭（1名）の場合、「頼れる親族がいる」と回答した（表3）。

表１ 保護者の年代

調査実施時期	10代		20代		30代		40代		計
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
第1回（2014.7～9）	0	0.0	18	15.1	89	74.8	12	10.1	119名（100%）
第2回（2015.1～2）	0	0.0	21	22.3	69	73.4	4	4.3	94名（100%）
第3回（2016.8～9）	1	1.0	28	26.9	65	62.5	10	9.6	104名（100%）
第4回（2017.9～10）	0	0.0	29	27.1	70	65.4	8	7.5	107名（100%）

表２ 利用者（子ども）の出生順位

利用者	人数（%）	
第1子のみ	86	80.4
第1子と第2子	15	14.2
第2子のみ	6	4.7
第2子と第3子	0	0.0
第3子のみ	1	1.9
計	107名（100%）	

表３ 家族構成と頼れる人との関連

	家族構成	頼れる親族	
		頼れる人あり 数（%）	頼れる人なし 数（%）
第4回	パートナーと同居	85（80.2）	21（19.8）
	ひとり親家庭	1（100）	0（0.0）

表４ オープンスペースを知ったきっかけ（複数回答）

項目	人数（%）
口コミ	36（33.6）
大学のチラシや看板を見て	10（9.3）
インターネット	29（27.1）
子育て情報誌	7（6.5）
区役所や公民館	17（15.9）
市の広報紙	1（0.9）
その他	23（21.5）

（２）オープンスペースを知ったきっかけ

オープンスペース「いーぐる」を知ったきっかけを尋ねた結果は、表４の通りである。これまでの調査結果と同様に、「口コミで知った」の割合がもっとも高く、次いで「インターネット」となっている。とりわけ、今回の調査結果の特徴としては、「区役所や公民館」と回答する者の割合が前回調査結果の2.3倍となり、「その他」の具体的な内容として、新生児訪問の助産師や小児科、他のオープンスペースで教えてもらったという記述がみられた。

（３）オープンスペースの利用理由

オープンスペースの利用理由は、「最も当てはまる」、「当てはまる」、「当てはまらない」

表5 オープンスペース利用理由

項 目	第3回調査	第4回調査			
	3件法 平均値	当てはまらない(%)	当てはまる(%)	最も当てはまる(%)	3件法 平均値
自分の友人を作ったり、友人と交流	1.91	20.5	64.5	15.0	1.94
悩みを気軽に話せる場がほしかった	2.12	13.0	63.6	23.4	2.09
相談に対してアドバイスがもらえる	2.00	16.8	57.0	26.2	2.09
いーぐる通信・SNSから情報が得られる	1.60	58.9	35.5	5.6	1.47
子どもが喜ぶから	2.77	0.0	14.0	86.0	2.86
同じような年齢の子どもとの交流	2.57	3.7	30.8	65.5	2.62
子どもを集団になれさせるため	2.57	6.5	28.0	65.5	2.59
育児休暇後の復職に向けて、子どもの 保育所入所の準備として	1.46	71.0	20.6	8.4	1.37
幼稚園就園の準備として	1.34	58.9	29.0	12.1	1.53
幼稚園選びのための情報を得る	1.30	72	26.2	1.90	1.30
ストレス解消やリフレッシュ	2.78	0.9	24.3	74.8	2.74
設備や遊具が充実している	2.72	0.9	27.1	72.0	2.71
親子で絵本を楽しめる	2.36	14.0	52.3	33.7	2.20
親子でいろいろなおもちゃで遊べる	2.75	1.9	15.9	82.2	2.80
親子で砂遊びができる	2.03	22.4	40.2	37.4	2.15
季節感のある室内装飾を楽しめる	2.01	25.2	57.0	17.8	1.93
身体計測ができる	2.05	17.8	55.1	27.1	2.09
月曜日に子育て相談がある	1.50	39.3	56.1	4.60	1.65
講座や講習会がある	1.73	31.7	53.3	15.0	1.83
日替わりで、保育士さんの「おかえりの会」がある	1.92	33.6	42.1	24.3	1.91
あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむ	2.58	6.5	29.9	63.6	2.57
安心して自分がトイレに行ったり、下の子の授乳ができる	2.15	26.2	34.6	39.2	2.13

の3件法で回答するものとした。この平均値は表5の通りである。

多く挙げられた項目に着目すると、「子どもが喜ぶから (2.86)」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから (2.80)」、「ストレス解消やリフレッシュできるから (2.74)」、「設備や遊具が充実しているから (2.71)」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから (2.62)」、「子どもを集団になれさせるため (2.59)」、「あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむから (2.57)」の数値が高く、この傾向はこれまでの調査と変わらなかった。

（４）子どもについての気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごとを尋ねた結果は、図１の通りである。

気がかり・心配ごとに「食事」を挙げた者は63.6%と最も多かった。次いで「トイレトレーニング」が41.1%、「からだの成長」が40.2%であった。

「その他」の記述内容は「子どもの健康」、「子どもの発達」、「子ども同士の関わり」、「親

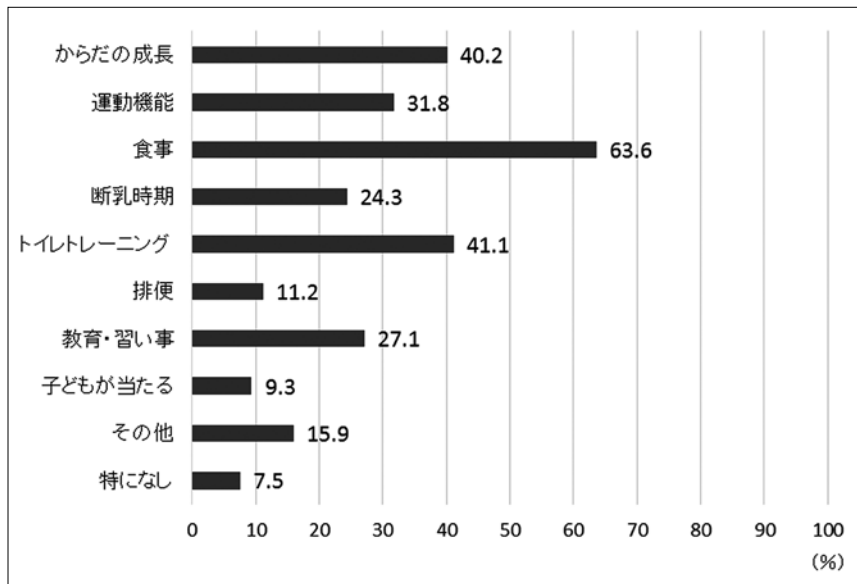


図１ 気がかり・心配ごと（複数回答）

表６ 気がかり・心配ごと「その他」自由記述

分類	記 述 例
子どもの健康	アトピー性皮膚炎
	歯磨き。仕上げ磨きはもちろん、自分でするのも最近嫌がるので。
	睡眠
子どもの発達	言葉をまだしゃべらない。
	すぐに走ってどこかへ行ってしまうとする。迷子になっても泣かない。周りの子が泣いたり甘えたりすると、真似して楽しそうにしている。
	穏やかな子に育ってほしいが、すぐ嫌がって怒ったりするので関わり方が難しい。
	痙攣を起こす
子ども同士	子供同士のおもちゃの取り合いの対応や、押したりたたいたり、蹴ったりする子への注意の仕方を教えてほしい。
	他の子どもと一緒に遊べるか、母親がべったりじゃなくても遊べるか。
親自身の悩み・心配	夜泣き
	あまり人と交流が少ないので他の人に慣れない。
	これから幼稚園に行くが、集団生活ができるか不安。私の子供が見えないので心配。
	外出時の食事が大変（食べ散らかし）。

自身の悩み」に分類でき、なかでも「親自身の悩み」のなかで夜泣き・睡眠に関わる記述が5件あり、これは第1回から第3回の調査結果ではほとんど見られなかった特徴である(表6)。

さらに、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用者にその詳細を尋ねたところ、もっとも多かったのは「好き嫌いがある」(36.8%)で、「かまない」と「そもそも私は料理が苦手」(ともに23.5%)と続き、他に「食べる量が少ない」(22.1)や「食物アレルギーがある」(14.7%)という回答が得られた。

(5) 食事に関する気がかり・心配ごとと「その他」の自由記述

子どもの食事についての気がかり・心配ごとで「その他」に記述された内容は、「食べ方」に関するものが多かった(表7)。

(6) 気がかり・心配ごとと子どもの年齢との関連

オープンスペースを利用する子どもと気がかり・心配ごととの関連をみると、第3回調査において第1子に関連があることがわかったが、今回の調査では気がかり・心配ごとと出生順位との間に関連はみられなかった。

(7) オープンスペース満足度

オープンスペースについて満足しているかどうかを尋ねたところ、「満足」が94名(87.9%),「ふつう」が7名(6.5%),「不満」が6名(5.6%)となり、8割以上の利用者が満足と回答したことがわかった。

(8) 利用保護者自身について

利用保護者自身について、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」、「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」、「子どもにイラッとすることがある」、「子どもに手をあげて後悔することがある」の項目を設け、「よくある」「時々ある」「たまにある」「ない」の4件法で回答するものとした。

結果は表8の通りである。ただし、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の項目は、第1子のみ家庭には答えられないため、その場合は「ない」にチェックするよう指示をした。ここでは、本項目に該当する23名の回答割合を示した。

この「よくある」「時々ある」の回答割合に注目すると、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」が78.3%でもっとも高く、次いで「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」が63.6%,「子どもにイラッとすることがある」が47.7%,「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」が40.2%,「子どもに手をあげて後悔することがある」が5.6%であった。

表７ 食に関する気がかり・心配ごと「その他」自由記述

分類	記 述 例
食べ方	食べムラがある。
	食べる量が多い。
	完食することがない。すぐに席を離れようとする。
	硬いもの（肉など）を出すと残す。
	汚す。
	食事の途中でぐずる。手づかみしてくれない。食べさせてもらいたがる。好きなもの以外自分で食べようとししない。
	野菜をほとんど食べず、ごはん、パン、鮭、うどんなどを食べる。兄がいるため味の濃いお菓子もよく食べるようになった。
進め方	食べる量。よく食べるのでどれくらいあげたらよいのか。
	バランス良く、栄養をとらせるのに毎食どんな工夫をすればいいのか悩むときがあります。
	まだ授乳中なのですが、飲む量が分からず、飲ませすぎて大量に吐いてしまうことがある。
	離乳食の進め方・栄養面。
調理技術	手早く作れる料理。
	離乳食の調理の工夫。
	簡単に作れるレシピを増やしたい。何でもよく食べるので色々な料理に触れさせたほうがいいのかと思って。
	作るものが大体同じになってしまう。
嗜好	食に興味がなさそう

表８ 利用保護者自身について

	よくある	時々ある	たまにある	ない
	人数（％）	人数（％）	人数（％）	人数（％）
手をあげて、後悔してしまうことがある	1（0.9）	5（4.7）	22（20.6）	79（73.8）
子どもにイラッとすることがある	22（20.6）	29（27.1）	42（39.3）	14（13.1）
上の子を我慢させてしまう （第一子のみ家庭除く）	13（56.5）	5（21.8）	5（21.8）	0（0.0）
外出したいが疲れてしまい出られない	11（10.3）	32（29.9）	33（30.8）	31（29.0）
ダメと制止する言葉が多くなる	40（37.4）	28（26.2）	30（28.0）	9（8.4）

表9 利用保護者自身についてと頼れる親族の有無人との関連

項目			ダメが多い				外出疲れる				上の子我慢				イラッとする				手をあげる			
			よく	時々	たまに	ない	よく	時々	たまに	ない	よく	時々	たまに	ない	よく	時々	たまに	ない	よく	時々	たまに	ない
選択肢																						
頼れる 親族	あり	人数	34	25	22	5	7	25	29	25	12	5	4	65	18	21	36	11	1	5	15	65
		%	39.5	29.1	25.6	5.8	8.1	29.1	33.7	29.1	14.0	5.8	4.7	75.6	20.9	24.4	41.9	12.8	1.2	5.8	17.4	75.6
	なし	人数	6	5	8	4	4	7	4	6	1	0	1	19	4	8	6	3	0	0	7	14
		%	28.6	14.3	38.1	19.0	19.0	33.3	19.0	28.6	4.8	0.0	4.8	90.5	19.0	38.1	28.6	14.3	0.0	0.0	33.3	66.7

(9) 利用保護者自身についてと頼れる親族との関連

利用保護者自身について、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」「子どもにイラッとすることがある」「子どもに手をあげて後悔することがある」の5項目と、「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無」との関連をみた結果は、表9の通りである。

「よくある」「時々ある」の回答割合に着目すると、「頼れる親族」の有無との関連をみたところ、「子どもにイラッとすることがある」は頼れる親族の有無に関わりなく同じ傾向がみられるが、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」は「頼れる親族あり」が「頼れる親族なし」より26ポイント、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」は「頼れる親族あり」が「頼れる親族なし」より15ポイント、「子どもに手をあげて後悔することがある」は、「頼れる親族あり」が「頼れる親族なし」より7ポイント、それぞれ高いことが明らかになった。一方、「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」は「頼れる親族なし」が「頼れる親族あり」より15ポイント高いことが明らかになった。

(10) 自由記述から

質問紙最後の自由記述には、毎回多くの感想が寄せられた。

具体的には、「い〜ぐるに来ると、（子どもは）目をキラキラさせて嬉しそうです。」「とても楽しく利用させてもらっています!」や「ゆったりとした雰囲気です。過ごしやすいです。」「親子でリフレッシュできます。」「いつも楽しみに来させてもらっています。少々しんどくても『い〜ぐるなら』と思ってくることができます。」「生後4ヵ月頃から通っています。いつも先生方の温かい対応に肩の力が抜け、ほっとし、助けられています。」「先生方が一緒に子どもの成長を見て喜んで下さるのが、とても励みになります」などがあつた。

(11) 考察

オープンスペース開設から3年目に入ると、これまで利用していた子どもの成長に伴い幼児向けサークルへ移られた方、大学近隣住民の転出・転入、オープンスペースの認知度

が高まり新規利用者が増えるなど、利用親子の顔ぶれが変わってきた。とりわけ、2015年10月以降は0歳児の利用割合が高まっている。

しかし、属性や家庭環境は第1回調査時とそれほど変わらない。たとえば、利用保護者の年齢別割合を見ると30代がもっとも多く、ほとんどがパートナーと同居しており、核家族世帯の割合が非常に高い。子どもは第1子のみ、という家庭が8割に上り、利用者の8割には何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいる。

オープンスペースを知ったきっかけは「口コミ」と回答した利用者の割合がもっとも高いが、その数値は2015年度の調査よりも約10ポイント減っている。

一方、「区役所や公民館」の回答割合は前回調査結果の2.3倍となり、さらに「その他」の回答者の具体的な記述には、新生児訪問の助産師や小児科、他のオープンスペースで教えてもらったというものがあつた。前者については、オープンスペース利用者が公的機関の催しなどにも積極的に参加していることが推察され、同時に、公的機関の効果的な広報活動の結果とも考えられる。また、後者について、2016年度は保健師との連携企画の実施や広島市南区オープンスペース交流会への参加など、外部機関との関わりが増えており、これらがオープンスペースの認知度を高めたと推察される。

オープンスペース利用の主な理由は、「子どもが喜ぶから」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから」、「ストレス解消やリフレッシュできるから」、「設備や遊具が充実しているから」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから」、「子どもを集団になれさせるため」、「あたたかく迎えられ、ほっとところがなごむから」であることが明らかになった。

子どもについての気がかり・心配ごとについては、利用者の6割以上が「食事」を挙げており、この割合は過去の調査と比較してもっとも高いものであつた。次いで「トイレトレーニング」、「からだの成長」であつた。「食事」に関わる気がかり・心配ごとは毎年トップに挙がるが、2016年度は十分なフォローができなかった。今後の食の講習会の持ち方を検討したい。

また、気がかり・心配ごとの「その他」の記述内容について、2015年度の調査では「子どもの発達（いやいや期への対応）」についての記述が多くなされていたが、2016年度の調査では「親自身の悩み（夜泣き・睡眠）」に関わる記述が11件中6件と比較的多かつた。その背景として、利用子どもの年齢・月齢が2015年度よりもやや低い傾向がみられ、気がかり・心配ごとの中身が変わってきたことが考えられるが、子育てアドバイザーの丁寧な個々の利用者への対応や毎週月曜日の「なんでも相談」のほか、交流会「なんでも語ろう会」が複数回開催されていることも、これまで挙がっていた「子どもの発達」に関わる気がかり・心配ごとの軽減につながっているのではないかと思われる。

次に、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用者とその詳細を尋ねたところ、もっとも多かつたのは「好き嫌いがある」であり、次いで「その他」であつた。「その他」の具体的な記述には、食べ方にムラがある、食事の途中でぐずる、手づかみしてくれないなど、子どもの「食べ方」に関するものが多かつた。

オープンスペース満足度については、「満足」と回答した者が9割近くいることが明らかとなった。一方、「不満」と回答した6名の質問紙の「自由記述」を精査してみると、3名は開室時間の延長希望、催し物の定員数の増員希望、企画内容の要望であり、他の3名は記載されていなかった。後者3名については、恐らく選択肢の並べ方を直前の設問選択肢のように好意的な内容を最初に置かず、「不満」「ふつう」「満足」とあえて逆の順番に設定したため、前の設問に引きずられたのではないと思われる。

利用保護者自身について尋ねたところ、子どもに対し「よくある」「時々ある」と回答した割合は、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」がもっとも高く、次いで「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」が高いことがわかった。

さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」、「子どもに手をあげて後悔することがある」の3項目は、「頼れる親族あり」が「頼れる親族なし」より回答割合が高いことが明らかになった。一方、「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」は「頼れる親族なし」が「頼れる親族あり」より高いことが明らかになった。これらの回答から、頼れる親族がいる場合も、いない場合も、利用保護者が一人でさまざまな葛藤を抱えながら子育てを担っている様子が垣間見えた。

中島・秋葉ら(2015)は、非就労の母親は「子どもが幼いうちは、母親が家にいて子どもを育てるべき」と考え、その理由として「母親が乳幼児と離れることで子どもがさみしい思いをしてしまうから」とする者が多数派であり、「一人の大人の手だけでは子どもは育たない」を支持する者はごく少数であったことを明らかにした。内閣府の調査(2012)によると、「子どもに手がかかるうちは、妻に働いてほしくない(ほしくなかった)」の質問に「とてもそう思う」、「ややそう思う」と回答した割合は既婚者男性全体の42.9%を占めた。その詳細を見ると、60代の既婚男性の53.1%に次いで20代の既婚男性が47.1%と半数近くを占め、30代は37.4%、40代で37.9%であった。「育児は母親の手で」という意識をもつ既婚男性が少なくないことを示している。

一方、ベネッセの調査(2011)によると、子どもが0歳児期に夫の育児参加が多いと、その後も夫の子育て参加が維持される傾向があることが示された。これらのことから、今後、筆者らオープンスペース運営者は、これまで同様に子育てアドバイザー、教員、学生との開かれた関係を保ちつつ、パートナーの参加を促すような企画・支援方法も検討していく必要があると考える。利用保護者と家族のエンパワーメントである。また、2016年度の保健師との連携企画は、助産師とつながり、子育て支援を受けてほしい人が受けられるようなアウトリーチ的な役割を果たすことを確認できた。引き続き2017年度も実施していきたい。

最後の自由記述からは、オープンスペースの環境や子育てアドバイザーに対する満足感と期待が伝わってきた。本調査結果について子育てアドバイザーに感想を求めたところ、

「１歳以上のお子さんを持つ利用保護者から『疲れさせたい』『もっと体を動かしたい』という声を聞く。１歳以上のお子さんについては体を使った遊びを取り入れたい」や、「イベントも大事だが、いーぐるでは日常の基本的な生活習慣を身につけることも大切にした」、 「利用保護者と子どもが遊びを創る、という意識が必要かもしれない」、 「手作りおもちゃの充実をしていきたい」といった声をいただいた。

まとめと今後の課題

オープンスペースを利用している保護者を対象に第４回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、主な利用保護者の年代は30代であり、第１子のみが利用している割合は約８割であった。ほとんどが核家族で、何かあった時に頼れる親族がいる者も８割いることが明らかにになった。

第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「口コミで知った」の回答者がもっとも多く、次いで「インターネット」だったが、特徴的なこととして「区役所や公民館」の回答割合が前回調査結果と比べて倍増し、「その他」の詳細では、助産師や小児科、他のオープンスペースなど外部機関からの紹介とする記述がみられた。

第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は「子どもが喜ぶから」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから」、「ストレス解消やリフレッシュできるから」、「設備や遊具が充実しているから」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから」、「子どもを集団になれさせるため」、「あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむから」であった。

第四に、子どもについての気がかり・心配ごととして、６割以上の者が「食事」を挙げ、次いで「からだの成長」「トイレトレーニング」の割合が高いことが明らかとなり、これら気がかり・心配ごとの具体的な記述内容から、保護者一人ひとりへの丁寧な支援が必要であることが示唆された。

第五に、オープンスペースに対しては、９割近くの利用者が「満足」と回答した。

第六に、利用者自身については、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまふ」が高いことがわかった。さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、頼れる親族の有無に関わらず、利用者一人で子育てを担っている様子が窺えた。

本学オープンスペースにおける第４回質問紙調査により、利用者への支援の成果や満足度、課題が明らかとなった。オープンスペースが気分転換・安心できる場所、他の利用者となつなぐ場所、交流を深める場所としての機能を果たすことはもちろんであるが、今後の子育て支援のあり方を考える際、国の示す「保護者が子育てについての第一義的責任を有する」の「保護者」は母親だけなのかと問い直すことも重要なポイントと考える。例えば、アンケート調査の自由記述にある「土・日も開室してほしい」という要望の背景には、パー

トナーにも子どもと一緒にオープンスペースを利用してほしいという気持ちがあるように思われ、また、近年注目されているフィンランドの出産・子育て支援制度「ネウボラ」²⁾では、家族全体への支援も重要な視点の一つとして取り上げられているからである（高橋睦子, 2015）。

今後、子育て支援の質をさらに高めるものとして、本学オープンスペースはどこまでの支援が可能なのか、どのようなプログラムを用意すべきなのか、子育てアドバイザーの協力も得ながら検討していきたい。

【謝辞】

質問紙調査にご協力下さいましたオープンスペース利用者の皆様と、本事業に携わる保育士、外部講師、事業を支えて下さる地域のサークルの皆様、そして、本学の教職員に厚くお礼申し上げます。

注

1) 平成28年度公募型常設オープンスペース利用状況報告書（平成28年4月から平成29年1月まで）

2) 「ネウボラ（neuvola）」は「出産・子育て家族サポートセンター」と訳されている。

妊娠から就学前まで、かかりつけの専門職（主に保健師）が担当の母子および家族全体に寄り添うと同時に、子育て家族本人たちにとって身近なサポートを得られる地域の拠点でもある。フィンランドと日本では福祉政策に大きな違いがあるため、他国の情報は日本にとって役に立たないと思われがちであるが、子どもをめぐる社会問題の背景を考える際、大いに参考になる。

引用・参考文献

ベネッセ次世代育成研究所. (2011). 第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査.

(<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=3157> 2017.2.6閲覧)

前田正子. (2014). みんなでつくる子ども・子育て支援新制度：子育てしやすい社会を目指して. 京都：ミネルヴァ書房.

高橋睦子. (2015). ネウボラ：フィンランドの出産・子育て支援. 京都：かがわ出版

内閣府. (2012). 「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告書

(http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei_ishiki/index.html 2017.2.6閲覧)

内閣府 子ども・子育て支援新制度

(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/index.html#toukei>, 2015.12.5閲覧)

中島美那子, 秋葉美奈子ら. (2015). 「社会全体で子育て」は可能なのだろうか：母親の意識から茨城キリスト教大学紀要, 1, 人文科学 (49), 123-135.